

研究タイトル：多様なソーシャルインターアクションによる英語表現力育成



氏名：	太田 伸子 / OHTA Nobuko	E-mail：	ohta@ishikawa-nct.ac.jp
職名：	教授	学位：	修士(MA TESL)
所属学会・協会：	大学英語教育学会、TESOL 学会、社会言語科学会、全国高専英語教育学会、外国語教育メディア学会、全国英語教育学会、金沢大学英文学会、日本英文学会、日本実用英語検定協会		
キーワード：	コミュニケーション力、第二言語習得、応用言語学、社会言語学、語用論		
技術相談	<ul style="list-style-type: none"> ・英語コミュニケーション力育成 ・談話分析 		

研究内容：多様なソーシャルインターアクションと語用論の学習方略利用による英語表現力育成

どうすればより効果的に英語表現力を育成できるのでしょうか。日常的な人と人の交流において機能するコミュニケーション技能(Basic inter-personal communication skills)を得るために、応用言語学の理論、特に語用論の概念の紹介と演習が学習方略獲得に有効である。「既存知識を有効に活用できる学習者が、外国語学習に優れる」との前提に基づき、「語用論」の内容を教授法に取り入れ、それを既存知識として活用することを学習者に促す指導法を示す。

コミュニケーション能力は「文法的能力」「方略的能力」「談話的能力」「社会言語的能力」で構成される。「社会言語的能力」については、多様なソーシャルインターアクションが大きくかわるといえる。「方略的能力」について言うなら、目標に対して自分自身の心理過程について明確な認識を持ち、適切な方略を使うことができると言語をうまく学習できる。「言い換え」「借用」「しぐさの利用」などの「コミュニケーション方略」の存在を学習者に既存知識として学習させると、学習方略に利用することができる。

意味を扱う「意味論」と対比される「語用論」は、文脈や状況との関係で意味が変わることに焦点をあてている。実世界の知識や、言語の使用者とコミュニケーションの機能によって、言語のやりとりの解釈と使用に影響がある。語用論の中から、特に会話における「推論」に関する知識を演繹的に学習者に提示することによって、既存の構文知識や語彙力をさらに有効に活用できる。「間接的発話行為」や「会話の含意(会話のやり取りに影響を与える暗黙の規則)(Grice 1967)」に注目し、コミュニケーション方略として活用することが有効である。

ある程度英語が読め、文法的知識もあり、かなりの語彙力もあるにもかかわらず、会話において効果的に英語を使えない「偽りの初心者(Helgesen1987)」減らすために、学習者に発話のメカニズムを学習させ既存知識としたうえで、多様なソーシャルインターアクションの機会を持たせることが、英語の言語技術(産出的言語技術と受容的言語技術)向上に効果をもたらす。

学習には不安がつきものであるが、外国語では「本当の自分ではなく、自分の一部しか表現できない」という不安が、他の学習不安と異なる点である。多様なソーシャルインターアクションと語用論的知識活用を英語の学習不安を払拭する助けとし、英語表現力育成を促すことができる。

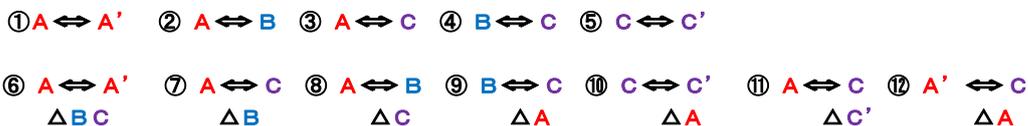


図1 多様なソーシャルインターアクション例 ↔ はインターアクションの当事者 △ は当事者ではないが同席している者

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	